

バカ達と巫女とお稲荷 さん

エルシオンガンダム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

FFF団に追われていた明久、雄二、康太は、突然現れた穴に落ち、気がつけば空から落ちていた。そしてやってきたのは、あの有名な京都であった。そして3人は、ちよつと変わった二人の巫女さんや神様に出会い、楽しくて面白い生活が始まるのであった。

OP：今日に恋色

ED：エウレカベイビー

目次

プロローグ | 1

第1話：神と巫女と大落下 | 6

第2話：ゲームと異世界と自己紹介

16

プロローグ

タッタッタッタッタッタ……

「はあっ！ はあっ！ はあっ！ ……」

「はあっ！ はあっ！ はあっ！ くそっ！」

「……………」

みなさんこんにちは。吉井明久です。今僕は親友の坂本雄二とムツツリーニこと、土屋康太と一緒に逃げています。

何にからというところ……

『待ちやがれ吉井！』

『死ねえ坂本！』

『くたばれムツツリーニ！』

『貴様らだけでいい思いができるとおもうなあああああ!!』

……FFF団からです。

「……なぜこうなった」

「そんなの僕（俺）が聞きたいよ（ぜ）」
本当にどうしてこうなったんだろう。

たしかあれは今朝のことだった――

「おはよう、雄二、ムッツリーニ」

「うーっす」

「……おはよう」

僕は雄二とムッツリーニにでつて、とある課題をだした。

「そういえば今日、不思議な夢を見たんだ」

「夢？」

「うん」

夢の内容はこうだった。

自然がたくさんある世界で、知らない男の子や可愛い女の子、綺麗な女性がいて、その中に僕やムッツリーニ、雄二もいて皆で笑いあつてる夢だった。

「明久、その夢俺も見たぞ」

「……俺も」

「え！ 二人もみたの？」

「………さいこうの夢だった」ダラダラ

「ムツツリーニ、鼻血が出るよ」

「……これは日射病のせい」ダラダラ

「今は秋だぞ」

それから文月学園について美波や姫路さん達にも夢のはなしをした。

それからどこから漏れたのか。

そしてどんな解釈されたのか。

放課後の今にいたる。

ちなみに全員バッグを抱えて走っています。

「アキ！ ウチに黙って恋人がいるってどういうことよ!？」

「明久君！ ohanashideath！」

「姫路さん！ 「です」の意味が間違ってるよ!？」

「アキ君、不純異性交遊の罰を」

「ってなんで姉さんが此処にいるんだ!？」

「先ほどアキ君が逃げていくのをみかけたので訳をきいたら、アキ君が複数の女性を

ピーやバキューンなど

をしていると聞いて、鉄槌の手伝いを」

「公衆の前でそんな卑猥なこと言うなああああ——————!!!」

「……雄二」

「つて翔子！ なぜお前が!？」

「……雄二……今度こそ、徹底した調教を」

「それ完全に俺に未来がねえだろ!？」

『ムツツリニ!! 貴様二次元だけでは飽き足らず、本物の彼女まで持ちやがって!!』

「……そんなことはない」

『黙れ!! 異端者に傾ける耳など持たん!』

くそっ! どうして僕等の周りには最低でもしかないんだ! 美波には間接を折られ、姫路さんから殺人弁当を食わされ、家では姉さんから折檻やらコスプレやらされて、学園でもFFF団やくそババアのせいひどいめにあつて。

(もうこんな生活いやだ)

(どっか静かな所に)

(……女の子がいろいろいるところに)

「助けてくれええええええええ——!!!」

僕たちは助けを呼んだ。

すると――

「え!?!」

「な!?!」

「!?!」

急に足場から穴が出て、僕等はその穴に落ちた。

第1話：神と巫女と大落下

伏見稻荷大社 とある神社内

『うか！ 君が好きだ！』

「うふふっ♪ どうしよっかな♪」

やあ皆、私は『宇迦之御魂神（ウカノミタマノカミ）』。友人からはうか様って呼ばれてるんだ。

今私は、大好きな恋愛ゲームをやっているんだ。くうう！ 此処まで来るのに何週間経ったことやら。

「やっぱり此処は好きで！」

私は○ボタンを押し、エンディングを迎えた。やった！ やったよハイジ！ 私頑張ったよ！

コンコン

「？ 誰だい？」

ガチャ

「私ですよ、うか様」

「ああ、朱乃か」

この子は『姫島朱乃』、この大社で暮らしている巫女のひとりだよ。この子は種族が墮天使なんだけど、訳あって悪魔になったんだ。性格もちよつと攻め派だけど、かなり良い子だよ。前に私の兄が私に抱きつこうとした時に雷で倒して捨ててくれたんだ。

「あらあら♪ また例のゲームですか？」

「やつと恋人ENDまで行けたよ」

「そうなんですか。良かったですね」

「ありがとう」

朱乃は私のことを知っている巫女の一人で、何かと私の手助けをしてるんだ。

「それで、一体どうしたんだい？」

「智さんが「お茶が出来たのどうか様を呼んできてくれますか？」と言われたので」

「そうだったんだ」

「それと、いなりちゃんも来てますから」

「いなりも？」

「今日はお休みらしいので」

「そっか。わかったよ」

「あ！ うか様！」

「やあいなり、会えて嬉しいよ」

「私もですよか様！」

「この子は『伏見いなり』、私の親友で私のことを知っている者だよ。御使いのコンを助けてくれた時に出会ったんだ。良く一緒に遊んでいるんだ。」

「うか様、お茶が入りましたよ」

「ああ智、ありがとう」

「それでこっちは『浅間智』、私のことを知っている者の一人で、弓矢が得意な子だよ。それでいて同人誌（18禁）とかを描いていたりするんだ。少し前に私が頼んだBL系のも描いてくれたんだ。」

「うか様、なんや嬉しそうやけど、どないしたんですか？」

「いやねいなり、前からやってたゲーム、やっと恋人ENDまでいけたんだよ！」

「そうなんですか？ 良かったですねうか様」

「確かあれ、結構難易度高い物でしたよね？」

「うん！ あの子をクリアするのに何週間掛かったことやら」

「そ．．．そこまでですか」

何処行つても友達ENDだったから結構苦労したよ。

「それよりも、皆でお茶飲みましょ！」

「そうだね」

「はい、今日は桜餅もありますよ」

「わあ、ありがとうございます！」

「それでは、いただきましょうか♪」

「はい！」

それから私達はお茶を楽しみながら雑談をした。

「そういえばいなりちゃん。丹波橋君とはどこまで行つたの？」

「え!? あつ．．．えつと．．．その」／／／

「うふふっ♪ その顔は進展なしってところかしら？」

「．．．はい」

いなりは『丹波橋紅司』という男の子に恋をしているんだ。

「そんなことでは駄目よ。もっと攻めて行かないと」

「あらあら、本当に落ちていますね？」

「朱乃さん、呑気に言わないでください！」

いなりがパ〇ーみたいな台詞で空に指を指していた。私達も空を見上げると、いなりの言うとおりに空から男の子が落ちていた。

「うか様！」

「わかつてる！」

私は神通力を使って、風を起こした。

「……………あれ？」

僕は変な浮遊感によって起きた。

「……………起きたか、明久」

「雄二？ ムツツリーニ？ どうしたのそんなに真っ青になって」

「……………下を見ろ」

「へ？ 下？」

「	「	「	「	「	「
・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・
」	」	」	」	」	」
ク	ク	ク			
ス	ス	ス			
っ	っ	っ			

ムツツリーニの言うとおりに、僕は下を見た。・・・あれく？ どうして地面があんなに遠いんだろう？ それになんか落ちてるみたいなき感じだな？

フワ

「え!?!」

「な!?!」

「!?!」

突如したから強い風が吹いて来た。

「フツ」

「あべし!」

「たわば!」

ムツツリーニは上手く着地できたけど、僕と雄二は地面に顔をぶつけた。

「だ・・・大丈夫かい?」

「え?」

「ああ?」

「む?」

「え?」

僕達は声が聞こえた方向に向いた。

そこには、

「君達、私のことが見えるのかい？」
綺麗な女性がいた。

第2話：ゲームと異世界と自己紹介

—うか様 side—

「君達、私が見えるのかい？」

「「……………」」

彼等は何を言っているのか解らない、と言った感じで頭に？ マークを浮かべた。その反応だけでも彼等は私の姿が見えていると理解できた。でもどういふことなんだろう？ 普通の人は私達神様を見ることが出来ないはずなんだけど。いなりの場合は私の力を少し分けたから見えるし、朱乃と智はかなり特殊だから。

…………いや、見える人もいるけど本当に少ないから。

「つと、そんなことより！ 君達大丈夫かい？」

「へ？ ええ、大丈夫です」

「下から風が突然吹いてきて驚いたが、なんとか大丈夫だ」

「……………」これ位は大丈夫」

「そうか、よかったよ」

とりあえず怪我はないみたいだね、よかった。

……あれ？ よく見たら3人共、少し服が大きい？

「うか様！」

「あ！ いなり！ 皆も！」

「どうですか？」

「大丈夫だよ。3人とも無事だよ」

「よかったですね」

「うん」

いなり達も来て、私達は彼等に向き直った。改めて見ると、ちよつと変わった3人組だね？一人は髪の毛が紺色で、ちよつと寡黙な感じの少年。一人は赤髪で3人の中では高身長で、ちよつと不良っぽい感じの少年。一人は茶髪で、なんだか少し女の子みたい……というよりは、少し勉強のできなさそうな……失礼だけど少しバカっぽいな感じの少年だった。

「うか様、この人等が？」

「うん、空から落つこちて来たみたい」

「そ、そうですか……」

流石に三人も困惑してるね。かくいう私も人間が空から降って来たことにはびっくりした。

「それで急で悪いけど、君達の名前を聞いて良いかな？」

「あ……ああ。俺は坂本雄二だ。坂本でも雄二でも好きなように呼んでくれ」

「雄二だね、それで君は？」

「はい！ 吉井明久と言います！ 気軽に「ダーリン」と呼んでください！」

『!?!』

……えっ、いきなりからダーリン呼び?!

「……失礼、忘れてください」

明久はしよげでした。……うけると思ったんだね。

「……ムツツリーニ、頼んだ……」

「……了解」

今度はちよつと寡黙そうな男の子の番だ。

「……土屋康太。趣味はどうsーなんでもない。特技はちようtーなんでもない。よろ

しく頼む」

『………』

「あらあら」／／／

えつと……今盗撮と盗聴って言おうとしたような……それと朱乃、なんで興奮してるの？

「僕達の自己紹介は終わったね」

「そんじやあ先にこつちが名乗ったんだ、今度はおたくらの名前を教えてください？」

つと雄二に言われて、私達は自己紹介をすることにした。確かに私達も名乗らなくちゃね？

明久サイド

「それじゃあ今度は私達がするね？」

僕達の紹介が終わり、今度は女性陣の紹介になった。

「まず私の名前は『宇迦之御魂神』だよ。みんなからは「うか様」て呼ばれているんだ」「うか様ですか。変な名前ですね？」

なんだか神様みたいな名前だな。

「……ちよつとまで明久」

「ん？ どつたの雄二？」

「宇迦之御魂神っていやあ、確かお稲荷で有名な日本の神様だぞ」

「あつ、そうなん……………」

あれ？ ちょっとまって？ ということは…………。

「そっだよ。私は君達のいう神様だよ」

「……………」

『な？』

「「な、なんだつてええええええええええええええええええ
 —————
 !!??
 「
 」」

『きゃ!!?』

アイエエエエ！ カミサマ!! カミサマナンドエ!?

……ん？ つてことは……。

「もしかして、さっきしたから強い風が来たのは……」

「あれは私が神通力を使って送り出したものだよ」

「ほ……本当に神様なんだ」

まさか生まれてこのかた神様に会えるとは思わなかったよ。しかもすつごく綺麗な女神様だ。

「それじゃあ次は私ですね」

「こんどは巫女さんが出てきた。」

「私は姫島朱乃と言います。高校三年でこの神社で巫女をやっておりますわ」

まさにお姉さまって感じだなあ。紺のポニーテールで、尚且つ巨乳という僕のストライクゾーンにクリティカルヒットしてる人だ。そんなことを思っていると雄二が、

「よかったな明久。お前の好みにドストライクな娘じゃねえか？」

「ちよつ！ 雄二それは言わないで!」／／／

「あらあらつ、明久君は私の様なのが好きなんですわ♪」ぷるん

「はい！ めちゃくちゃ好みです！（そ、そんなわけじゃないですよ!）」／／／

「明久、本音と建前が逆になってんぞ」

「あれ!？」

しまった！ 何時もの癖がでてしまった！

「ちなみに朱乃は訳アリの悪魔なんだよ」

「悪魔!?!」

「……奇奇怪怪」ダラダラ

すごいなあ、まあ神様もいるんだし悪魔がいても可笑しくないよね。……あとムツツリー二、鼻血出てるよ?

「次は私ですね。私は浅間智です。朱乃と一緒にこの神社の巫女をしています」

と……智さんの方もでかい! ……………つてあれ?

「目の色が違う?」

「確かに。オッドアイか?」

「ちよつと違いますね。翠の方は『義眼』です」

「へえ、そうなんだ」

義眼って確か、人口で作った目のことだよな? ゲームとかで良くでてくるから覚えておいて良かった。

「すごいなあ? その義眼見えるんだろ? 今でも義眼の開発は進んじやあいるが、あくまで外装用とかしかないんだが」

「私のは少し特別なんです」

本当に凄いなあ。胸もおつきいし、オッドアイで優しそうな性格だし、これで朱乃さんみたいにならたら良いなあ」

「おい明久、声が出てるぞ」

「あれ!？」

「あらあら、明久君は巨乳でポニーテールが好きなのですわ♪」

「なんとというか……」

「これはどないすればええんやろうか、うか様?」

「さあ……」

「やめて! そんな目でみないで!？」

女性陣達のリアクションに僕は叫んだ。解ってる、自分でも何言ってるんだっていうことには。

「とりあえず先進んでくれないか?」

と雄二は言ってきたので、最後に小柄な女の子の紹介になった。

「ウチは伏見いなりいます。よろしゅうに」

「その言葉遣い、京都弁か?」

「はい、ウチは此処伏見生まれなんです」

伏見? 伏見って確か京都の……?」

「ええ!?! 此処京都なの!?!」

「そうだよ」

「やったよ雄二、ムツツリー二！ あの京都だよ！」

「確かにこりやあすげえな？」

「……いつの間にか京都、摩訶不思議」

「いや、結構前から雄二とムツツリー二と三人で行きたいって言ってたから嬉しいな。」

あの魔物たちから逃げていたけど、あの穴京都に繋がってるなんてね。

「それで、明久達はどうして空から来たの？」

「それが、僕達にもさっぱり。追っ手から逃げるときに、突然僕達の足元に穴が現れて、気が付いたら落っこちていました」

「追っ手って、君たち何から逃げてたの？」

「そんなの決まっているじゃないか。」

「同級生からだよ」

『本当に何があつたの!?!』

僕と雄二が一緒に言うのと、逆にうか様達が叫びだした。うん、まあ普通に考えたら同級生を追手なんて言わないよね？

「何があつてって言う……」

それから僕達は、うか様達に何があつたのかを出来る限り簡単に説明した。

—うかサイドside—

「——と言う事です」

『……………』

事の経緯を明久達から聞いた時、私達はなんと言えば良いのかわからなかった。

……えっ、夢の話をしたら同級生の子達と雄二の幼馴染と明久の実の姉から殺されかけて、逃げている内にいつの間にか空から落ちていた？ 一体何をどうしたら、夢の話をしただけでそんなG○Aの指名手配レベル2みたいな展開になるんだろう？ それに気が付いたら空から落ちていたって言うのも引つかかるし…。

……まさか明久達って、最近（とは言っても30・40年以上前からだけど）ラノベとかで流行っているあれなんじゃ……。

「えっと……災難でしたね？」

「まあ俺たちからすれば日常茶飯事だけどな」

と思う。これでも私は穀物の女神。見た目よりも長く生きてる身だ。日本の地名もそこそこ知ってるし、この人間界の情報もテレビで見てたりする。後、受験生の燈日が持つてる地理系の教科書も幾つか読んだこともある。だから『文月市』という市や、文月学園学園という名前の学び舎もやっぱり聞いたことがない。

「ど、どういふこと雄二!?!」

「お前らゲームやつてるなら解るだろ? パラレルワールドつて奴だ」

「・・・確かにゲームで出てくる名だ」

「でも、どうして?」

「考えてもみろ? 突然足元に現れた穴に落ちたかと思いきや、いきなり空から落ちたんだぞ?」

「そうだね?」

「一体どこのどいつか分かんねえが、俺達を京都に連れて来るんなら足元に穴開ける必要はねえだろ?」

「確かに・・・」

雄二の言ってることは最もだけど、もしかしたらその世界の神がやったのかもしれないね?」

「それに、私は君たちの言っていた文月学園や文月市なんて聞いたこともないんだ」

「うか様でもですか？」

「うん。これでも結構長く生きてるから、その地方の土地の名とかにも自信はあるんだけどね…」

此処最近で新しく市の名前を変えたって言うなら、何かしらニュースとかになるはずだし。

「一応文月学園は色んな所に宣伝してたみてえだが、聞いたことないんだろ？」

「そうですね、私も聞いたことありません」

「私もですわ」

「うちも…」

学生であるいなり達も聞いたことないとなると、やっぱり別の世界から来たという可能性は高い。

「そして何より、俺達の携帯が圏外というのが何よりの証拠だ」

「え・・・本当だ!？」

雄二が懐から携帯を取り出し、私達の前に携帯の画面を見せた。そこには圏外のマークが映っていた。それを見て、明久と康太も自分の携帯を確認すると、どちらも雄二と同じく圏外のマークがあつた。

「・・・此処の電波が通ってない可能性は？」

「この辺りは大きな建物とかなないから大丈夫だよ。それにこの間、この伊奈里神社にもWiFiのルーターが設置されたんだ」

「それもあつてうか様、一日中マリカアのインターネット対戦に潜ってはりましたなあ？」

「いや〜楽しくなつてつい♪」

「つて神様もゲームやるの?!」

「失礼な！私だつて人間の流行には興味あるんだよ。最近はオービィディスカバリーとかポケオンSVとかやつてたりするよ！」

「勿論どっちもクリアしたんだよ？ まさかあれがああなるなんて思いもしなかったよ…。」

「おい明久。そこで驚くのは良いが、もっと大きな問題があるだろ？」

「え？」

「ここが俺たちの世界じゃねえってことはだ、

俺達……どこで寝泊まりするんだ？」

「あっ……」

その瞬間、明久と康太は膝から崩れ落ち地面に手を付いた。